

インドグreek貨幣の銘文——アポロドトス1世の方形銅貨

中村雅之

1. アポロドトス1世の貨幣

前2世紀～後1世紀頃に西北インドに侵入したギリシア人の王朝(いわゆるインドグreek朝)が発行した貨幣を紹介する。今回取り上げるのはアポロドトス1世の方形銅貨で、古代文字資料館の管理するものである。表にギリシア文字ギリシア語、裏にカローシュティー文字プラークリット語が記されている。この種の2言語表記貨幣は、インドグreek朝とサカ朝(=インドスキタイ朝)、そしてクシャン朝の初期に見られるもので、19世紀のカローシュティー文字の解読において大きな役割を果たした。

インドグreek貨幣に記されるアポロドトスには2人おり、一方をアポロドトス1世、他方をアポロドトス2世と呼び慣わしている。‘史書なきインド’と称されるように、詳しい歴史は不明であるが、アポロドトス1世の在位は前160-150年頃とされることが多いようである。銘文を伴うアポロドトス1世の貨幣には、少なくとも円形銀貨、方形銀貨、方形銅貨が存在する。これらはさらに、描かれた図像と銘文によって、以下のように分けられる。(3)は2世のものである可能性もある)

- (1) 円形銀貨。表：横向きの胸像。裏：座ったアテナ女神。ギリシア文字。
- (2) 円形銀貨。表：象。ギリシア文字。裏：こぶ牛。カローシュティー文字
- (3) 円形銀貨。表：弓と矢を持つアポロン。ギリシア文字。裏：三脚台。カローシュティー文字。
- (4) 方形銀貨。表・裏ともにほぼ(2)に同じ。
- (5) 方形銅貨。表・裏ともにほぼ(3)に同じ。

今回紹介するものは(5)に属する。銘文の内容は、(2)～(5)は同内容(後述)。(1)については、表にはアポロドトス1世の胸像のみで銘はなく、裏には右側に「**ΒΑΣΙΛΕΩΣ**(=Basileōs)」左側に「**ΑΠΟΛΛΟΔΟΤΟΥ**(=Apollodotou)」とあり、合わせて「アポロドトス王の」と読める。いずれも属格形であり、「アポロドトス王の[貨幣]」の意と理解される。貨幣の銘文の「王」を意味する語、ならびにその王名が属格で記されるのはマケドニアの風を襲ったもので、アレクサンドロスの父であるフィリッポス2世の貨幣にはすでに王名の属格形が見える。王名の属格表示はアレクサンドロス以後のいわゆるヘレニズム諸王朝の貨幣において均しく行なわれている。

2. 銘文の内容

本貨幣の銘文の内容を簡単に説明しておく。表のギリシア語は以下の通りである。

(左下から左上へ)「**ΒΑΣΙΛΕΩΣ**(=Basileōs)」

(左上から右上へ)「**ΑΠΟΛΛΟΔΟΤΟΥ**(=Apollodotou)」

(右上から右下へ)「**ΣΩΤΗΡΟΣ**(=Sōtēros、救済者の)」

すなわち、最初の2語は上述の(1)と変わらず、それに第3語が加わったものである。全体としては「救済者たるアポロドトス王の[貨幣]」ということになる。3語とも属格形である。なお、第2語(Apollodotou)は各文字の上半分が欠けており、末尾の4文字は全く見えない。また、第3語(Sōtēros)の第2字(Ω)も摩滅してほとんど見えない。しかし、これらの文字に関しては、他の類似の貨幣ならびに裏面のカローシュティー文字プラークリット語との対照からほぼ問題なく復元可能である。

次に裏面のカローシュティー文字であるが、表のギリシア語をプラークリット語に訳したものと考えて大過ない。内容は以下の通り。なお、この文字は右から左への横書きである。

(右下から右上へ)「maharajasa (=大王の)」

(右上から左上へ)「apaladatasa (=アポロドトスの)」

(左上から右下へ)「tradarasa (=救済者の)」

これらは表面のギリシア語とほぼ1対1で対応しているが、ギリシア語の「Basileōs (王の)」がプラークリット語で「maharajasa (大王の)」となっているのは興味深い。「王」を表わす語は本来「raja-」であるが、インド古来の呼称に則って「maha- (大いなる)」を冠した「maharajasa」になっている。

ギリシア語と同様、これらのプラークリット語も全て属格形で記されている。もっとも、カローシュティー文字で記されるこの西北プラークリット語(ガンダーラ語)については、詳しい文法を述べるのは容易ではない。幸いここでは、対応するギリシア語が属格であるという事実と、パーリ語に単数属格形「-ssa」が(さほど一般的ではないにせよ)在証されていることから、これら3語が属格形であると結論付けられる。

「tradarasa」はサンスクリット語の「trātṛ-」に相当する語の属格形と考えられる。「trātṛ-」は動詞語根「trā- (守る)」に、行為者を表わす接辞「-tr-」を付したもので、全体で「庇護者、救済者」の意となる。貨幣のプラークリット語においても、同様の語構成と考えてよいであろう。なお、この語がインドギリク貨幣に記される時には、「tradarasa」と「tratarasa」の両形がある。おそらく、語根「tra-」と接辞「-tara-」が結合する際に、連声によって有声化する場合としない場合があり、その両形が貨幣に現れたのではないと思われるが、これは門外漢である筆者の想像の域を出ない。

「tratarasa」の語形を持つアポロドトスの貨幣は、インド貨幣についての基本図書というべきグプタ(2001)の「貨幣図版 No.44」で確認できる。この貨幣は上で述べた(3)のタイプであるが、残念なことに、「図版解説」の転写は「tatarasa」と誤っている。単純な誤植であろうが、実はこの解説部分には、ほかにも多くの誤りがあり、その中には単なる誤植とは言えないものも含まれている。カローシュティー文字に関する部分だけを述べておけば、「No.47」では同じ語「tratarasa」を「trataras」と誤っており、「No.57」では、銘文は「No.54」に同じと記されているが、実際には異なる(No.54「...rajatirajasa...」、No.57「...rajarajasa...」)。機会があるならば、ぜひ徹底した校正を期待したい。

### 3. カローシュティー文字の書体

カローシュティー文字は、その字形はおおむねアラム文字に由来するが、母音の表示方法はブラーフミー文字に酷似している。すなわち、基本字母は特別の母音符号が付かないときには「a」を伴うものと見なされ、他の母音(i/u/e/o)はその基本字母に何らかの符号を付加することによって表わされる。

カローシュティー文字における書体上の大きな特徴として、「フットマーク(foot marks)」と称されるものがある。基本字母の最下部に独特のハネ、トメ、ハライなどを付加するもので、多種多様の形態がある。同一文書の同一字母でもフットマークが付加される場合とされない場合があり、判読に苦しむことが少なくない。現存最古の資料であるアショーカ王碑文(前3世紀)においても、すでにフットマークは用いられている。Glass(2000)は、碑文および種々の写本に見られるフットマークを type0 から type10 までに分類している。今回紹介したアポロドトスの方形銅貨には、そのうち type2 と type3 が確認できる。type2 は垂直線から左に跳ねるタイプで、本貨幣では上段の「a」「pa」「la」「ta」に見える。type3 は

水平の底辺を添えるタイプで、本貨幣では右側の「ja」「sa」と左側の「da」に見える。上段の「da」は type0（フットマークのつかないタイプ）で記されているから、本貨幣には同一文字の二つのタイプが現れていることになる。なお、それぞれの文字がどの書体で記されるかは貨幣ごとに異なる。そのため、同じアポロドトスの貨幣でも、フットマークの使用状況は個々別々である。

アショーカ王碑文に用いられるフットマークも type2 と type3 のみであることから、この二つが最も古いタイプで、他の多くのフットマークは後の写本において発達したものと考えられる。コインにおいてのみ確認されるフットマークとして、下部に曲線形を持つ ma や ha などの基本字母の真下あるいは左下に添えられる点（dot）があるが、本貨幣には用いられていない。Glass(2000)は、フットマークは音声的には意味を持たないとしている。

P.L.グプタ(2001)『インド貨幣史』山崎元一等訳、刀水書房。

A.Glass(2000) *A Preliminary Study of Kharōṣṭhī Manuscript Paleography* web上に公開されている。

([http://depts.washington.edu/ebmp/downloads/Glass\\_2000.pdf](http://depts.washington.edu/ebmp/downloads/Glass_2000.pdf))



表



裏